

食品の色彩嗜好についての国際比較研究  
—ジェンダーによる違い(日本の場合)—

○奥田弘枝\* 田坂美央\* 由井明子\* 川染節江\*\*  
(\*広島女学院大 \*\*香川県明善短大)

目的 食物の色彩は人間の食欲に影響を与えていることがこれまでの報告で明らかにされている。これらの報告は色彩嗜好と食欲の関係が中心になっているが、食欲には味覚が関与しているという観点からみると、色彩嗜好と味覚の間にも何らかの関連性があるのではないかと考えられる。そこで味覚と色彩嗜好を中心に7カ国(アメリカ、ドイツ、フランス、オーストラリア、中国、韓国、日本)の比較研究を行った。今回はまず、性別による味覚と色彩嗜好の違い(日本の場合)を報告する。

方法 20歳前後の男女828名を対象にアンケート用紙と基本的な有彩色として赤、オレンジ、茶、黄、黄緑、緑、青、紫、ピンクと無彩色の10色にそれぞれ明度、彩度の異なる5色ずつ合計50色からなるカラーチャートを提示し、回答を求める方法により、1996年9月～10月に調査を実施した。

結果 食欲を増す色として3色選ばせたが、男女とも赤、橙、黄、緑を選び、青、紫は選ばなかった。食欲を増すと感じる色は彩度が高く色が濃い方であった。味覚と色彩嗜好の関係では、甘味に対し、男女とも赤、橙、ピンクが多く、緑、黄緑、青、無彩色は回答がなかった。塩味には、男女とも無彩色が圧倒的に多かった。また、男女とも酸味については黄、黄緑、苦味には茶、緑が多く、うま味に対しては青、紫はなかった。